

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：34301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370062

研究課題名(和文) スティラマティの俱舎論注釈書『真実義』梵文写本第一章の研究

研究課題名(英文) A Study of Sanskrit Manuscript of Sthiramati's Tattvartha Chapter 1

研究代表者

小谷 信千代 (Odani, Nobuchiyo)

大谷大学・文学部・名誉教授

研究者番号：40141494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、インド仏教における最重要文献の筆頭であるヴァスバンドゥ(世親)の『アビダルマコーシャ』(阿毘達磨俱舎論)に対する、最も浩瀚にして最も詳細な注釈文献である、スティラマティ(安慧)の『タットヴァールター』(『真実義』)サンスクリット写本の解読研究である。この新出サンスクリット写本の解読から、インド仏教における最も優れた知的遺産のひとつであるアビダルマ教義学について、その理解の深度を深めることができた。それと同時に、これまでは玄奘による漢訳でしか参照することができなかったサンガパドラ(衆賢)の『順正理論』のサンスクリット文を大量に回収することができた。

研究成果の概要(英文)：The Present Study focuses on the Sanskrit Manuscript of Sthiramati's Tattvartha, which is the most highlighted and most detailed commentary on Vasubandhu's Abhidharmakosabhasya. From the reconstruction of the Sanskrit text, we were able to deepen the understanding of Abhidharma Scholasticism, one of the best intellectual heritage in Indian Buddhism. At the same time, we were able to recover a large amount of Sanskrit sentences of Sanghabhadra's Nyayasnusarini which could only be referred to by Chinese translation by Xuan zang. These are expected to provide one of the important basic materials to the academic world of Buddhist literature in the future.

研究分野：仏教学

キーワード：ヴァスバンドゥ 世親 スティラマティ アビダルマ 阿毘達磨 インド仏教 サンガパドラ 衆賢

1. 研究開始当初の背景

中世インドの仏教僧・スティラマティ(安慧)の手になる俱舎論注釈書『真実義』(アビダルマコーシャティカー・タットヴァールター)は、インド仏教の伝統において数多く著された『俱舎論』(アビダルマコーシャ)に対する注釈文献のなかで、最も大部にして最も詳細な注釈文献である。その重要性にもかかわらず、ある種の資料的制約、すなわち、従来においては不完全なチベット語訳や部分的に残る漢訳、漢訳からの重訳と推測されるウイグル語訳、またはモンゴル語訳などを通してしか読むことができなかつたため、解読研究の進展は一部を除いて見られなかつた。ところが、チベットのポタラ宮にサンスクリット写本が保管されてきたことが判明し、そして、その解読研究に取り組むことができる状況が整ったことにより、本研究を開始した。

次の三つの事項が、本研究の研究開始当初の背景にある。

(1) チベットのポタラ宮やノル布林カ宮に膨大な仏教写本が保管されていることが実際に確認され、ウィーンのオーストリア科学アカデミー・アジア文化思想史研究所と北京の中国蔵学研究中心との協力により、それら仏教写本の解読研究に着手できる状況が整ったこと。

(2) エルンスト・シュタインケルナー博士を中心として、チベット自治区発現のサンスクリット写本の解読研究が開始されるなか、本研究は、アビダルマ研究を専門とする研究者と、写本研究を専門とする研究者とによって、ポタラ宮所蔵写本解読研究の一翼を担うものとして組織されたこと。

(3) 近年、『俱舎論』のサンスクリット本(いわゆるプラダン本)からの邦語訳注研究が完成しつつある。2018年現在、『俱舎論』第三章「世間品」の梵本からの邦訳を残すのみ、という状況である。そして、インド撰述の『俱舎論』注釈書について言えば、ヤシヨーミトラの俱舎論疏『明瞭義』(アビダルマコーシャヴィヤーキヤー・スプタールター)も全体にわたって翻訳研究が出揃い、その全体の解読がひとまず終えられた状況にあると言つてよい。

以上の研究状況からして、『真実義』サンスクリット写本の解読研究は、インド仏教学研究、特にアビダルマ仏教文献研究の中で、優先的に取り組まれるべき研究課題のひとつであると言える。先述の通り、『真実義』は世親の『俱舎論』に対する注釈文献のなかで最も大部であり、俱舎論疏『明瞭義』のおよそ2倍の分量を持つと推測される。また、『真

実義』による注釈内容は他の注釈文献に比して極めて詳細であり、他の注釈文献には挙げられていない異説の紹介、引用されていない先行文献からの引用など、現時点で『真実義』からのみ回収されうる多くのテキストや出典情報が含まれている。さらに、『真実義』に引用される『俱舎論』の本文は現行のテキスト(いわゆるプラダン本)とは全同ではなく、しばしば異なる読みをもっている。したがって、『真実義』の解読研究は、『俱舎論』の原典研究にも有用であることが判明した。『真実義』のサンスクリット写本自体も、紀元8世紀から9世紀にかけて北インドで書写された写本と目され、年代的にも重要なものであり、この写本こそがチベット語への翻訳に際して用いられた二種のサンスクリット写本のうちのひとつと目される。以上のように、『真実義』の解読によってもたらされる成果が、諸多の点で今後のアビダルマ仏教文献研究を大きく進展させ得ることに疑いはない。本研究課題はこうした研究動向に位置づけられる。

2. 研究の目的

本研究は、『真実義』サンスクリット写本の解読を目的とする。ただし、そのサンスクリット写本の全体は膨大であるため、冒頭の第一章に対象範囲を限定して、解読を行なった。チベット自治区に現存するアビダルマ仏教文献の写本群のうち、『真実義』が重要文献のひとつであることに疑いはない。繰り返しになるが、ヴァスバンドゥによる『俱舎論』本論のサンスクリット本からの邦訳研究が完成を迎えつつある現在、『真実義』のサンスクリットテキストを再構成して学界に提供することは、アビダルマ仏教文献研究を次の段階へと導く新たな研究課題であると言える。

さらに、『真実義』は、後述するように、サンガバドラ(衆賢)の『順正理論』(ニヤーヤ・アヌサーリニーが原題と推測されている)からの引用を大量に含むため、『真実義』の解読研究は『順正理論』研究のための基礎資料を提供する。つまり、これまでほとんど断片的にしか知り得えなかつた、すなわちゲッティンゲン大学のトルファン出土サンスクリット写本 *Sanskriithandschriften aus den Turfanfunden* のコレクションの中にも含まれている、ごくわずかな断片しか発見されていなかった、『順正理論』のサンスクリットテキストの一部を、学界に提供することになる。

したがって、本研究の目的は、ひとまず、スティラマティマティの『真実義』の第一章に限り、そのサンスクリットテキストの Diplomatic Edition と Critical Edition を作成することである。

3. 研究の方法

研究の手順として、サンスクリットテキストとその試訳を準備したうえで、大谷大学にて定期的に研究会を開催し、共同で検討することを繰り返すというかたちで、研究を遂行した。具体的には、研究代表者（小谷信千代）がサンスクリットテキストとその試訳を用意した。そして研究会において、サンスクリット仏教写本の専門家であり研究分担者である松田和信と加納和雄が写本画像を精読し、研究代表者が用意したテキストに修正を加えた。その上で、本庄良文をはじめとする研究分担者と、随時研究会に参加していただいた、アビダルマ仏教研究を専門とする那須良彦と青原令知とを加えたメンバーで、アビダルマ教義学の議論を統合的に解釈するために議論を重ね、テキストと試訳の双方に修正を加えた。その過程で必要となる『順正理論』との比定作業については研究代表者が担当し、適宜引用される阿含経典や韻文の出典比定は松田が担当した。以上の手順で、繰り返し議論を重ね、読み合わせを行なってテキストを確定した。最終的には、小谷信千代と松田和信が Diplomatic Edition と Critical Edition、および邦語訳を作成した。

本研究を開始するにあたり、当該写本の第一章の 18 葉が未解読の状況であった。そのため、具体的目標として、各年度に 6 葉づつの解読を目指し、以下の通り研究計画を遂行した。

4. 研究成果

本研究では、以下の計画の通り研究を進めた。

（平成 25 年）当該年度の解読範囲は、「蘊」と「処」の定義箇所であり、中でも「蘊」定義箇所は異説も多く、スティラマティ、サンガバドラ、アーリヤダーサの見解がそれぞれ別れている。そのため、『順正理論』などから平行句の回収を図るとともに丁寧に解読する必要があった。そこで、サンガバドラの『順正理論』を参照して平行句を同定し、スティラマティの『五蘊論釈』における平行議論箇所、及びスティラマティマティの注釈を参照していると推測されるプールナヴァルダナの『俱舍論』注釈文献（チベット語訳）を参照しつつ、校訂作業を進めた。

（平成 26 年）前年度の作業を引き継ぎ、6 葉の解読を目指した。当該年度の解読範囲は「十八界」の分類考察箇所であり、「無記」「色界繫」などの付随的議論が展開される箇所であった。

（平成 27 年）前年度の作業を引き継ぎ、6 葉の解読を目指した。当該年度の解読範囲も、前年度と同様に「十八界」の分類考察箇所

である。そして「同分・彼同分」「見所断」「根と境との接触」など、前年度の残りの箇所から第一章の最後部までの解読を進めた。

（平成 28 年）前年度において第一章の最後までを解読したため、冒頭に戻り、再点検を開始した。

（平成 29 年）昨年度と同様に、一年間をかけて、これまでに解読したテキストの見直し作業を行った。具体的には（1）写本との再照合、（2）Diplomatic Edition の見直し、（3）Critical Edition の見直し、（4）Critical Edition への注記の付け足しと表記の統一である。特に（3）については、現在、暫定的に定めている批判的校訂テキストの編集方針を改めて確定し、その方針のもとに表記の統一を図った。

以上の研究計画に基づく本研究の成果として、次の点が挙げられる。

第一に、インド仏教における最重要文献の筆頭である世親の『阿毘達磨俱舍論』に対する、最も浩瀚にして最も詳細な注釈文献である、スティラマティマティの『真実義』サンスクリット写本の解読を行い、冒頭の第一章のみではあるが、その再構成テキストと試訳を作成し得たこと。具体的には、この新出サンスクリット写本の解読によって、インド仏教における最も優れた知的遺産のひとつであるアビダルマ教義学について、その理解の深度を深めるための資料を作成することができた。

第二に、これまでは玄奘による漢訳でしか参照することができなかったサンガバドラ（衆賢）の『順正理論』のサンスクリット文を大量に回収することができた。この点については、今後、新しいアビダルマ仏教の一次文献を学界に提供することとなる。なお、当該のサンスクリット写本から見る限り、サンガバドラのサンスクリット文は非常に読みにくい。あくまで我々の眼からすれば、という限定つきではあるが、サンガバドラのサンスクリットは「悪文」であるように思われる。こうした点は、『順正理論』が『俱舍論』ほどに流通しなかった要因であるかもしれない。しかし内容的には、サンガバドラによる『俱舍論』本文批判は重要視されていたようであり、その故にスティラマティはしばしば『順正理論』の記述を引用しているのであろう。サンガバドラによる批判について、スティラマティはそれを斥ける例が多いが、賛意を示す例もある。「『俱舍論』にあるこの証因は間違っている」との批判にスティラマティが賛意を示している例などでは、確かに現行の『俱舍論』テキスト（いわゆるプラダン本）にその証因の記述自体が存在しないのである（本来の『俱舍論』にあった証因の記述が、

何れかの段階で本文から削除された可能性がある。『順正理論』サンスクリットテキストと『俱舎論』との対比は、今後、『俱舎論』テキストの変遷史に新たな視点をもたらすことが予想される。

第三に、これまでサンスクリット文が回収されていない阿含經典の文句や、従来の研究では全く知られていない韻文などのサンスクリット文を回収し、その出典を特定することができた。これらのサンスクリット文も、今後の仏教文献学研究にとっては重要な一次資料のひとつとなることが予想される。

第四に、このサンスクリット写本の解読から、チベット語訳や漢訳などの各種翻訳資料の信頼性と位置づけとが明確になりつつある。これまでは、読解が困難なチベット語訳、断片的な漢訳（蘇軍、「阿毘達磨俱舎論實義疏」『蔵外佛敎文献』、北京：宗教文化出版社、pp.169-250）、漢訳からのウイグル語訳の断片（庄垣内正弘、『ウイグル文アビダルマ論書の文獻學的研究』、京都：松香堂、2008）など、仏教論師スティラマティ（安慧）の実態解明に迫るための資料が限定されていたが、特に、『真実義』チベット語訳は、サンスクリット写本と比較する限り、「誤訳」と判断される例は枚挙にいとまがなく、今後はチベット語訳を一次資料として研究を進めることは難しいであろう。また、漢訳については、必ずしもサンスクリット写本からの厳密な逐語訳ではないが、対論者を明示していたり、『順正理論』との対応関係が適切に把握されていたりと、有用であることが判明した。また、漢訳からの重訳と推測されるウイグル語訳も、庄垣内正弘 2008 から判断する限り、文脈の理解が正確で、有用であることが判明した。今後は、こうした『真実義』の各種翻訳資料に加え、ヨヴィタ・クラマーの手になるスティラマティ『五蘊論釈』校訂本や山口益の手になる『中辺分別論釈疏』校訂本をも用いた、スティラマティの実態解明に向けた研究が開始されるであろう。その際に、『真実義』サンスクリットテキストはその中心を担うことが予想される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

小谷信千代、秋本勝、上野牧生、加納和雄、福田琢、本庄良文、松下俊英、松田和信、箕浦暁雄、新出梵本『俱舎論安慧疏』(界品) 試訳(5)、真宗総合研究所研究紀要、査読有、35 巻、2018、185-204

小谷信千代、秋本勝、上野牧生、加納和雄、福田琢、本庄良文、松下俊英、松田和信、箕浦暁雄、新出梵本『俱舎論安慧疏』(界品) 試訳(4)、真宗総合研究所研究紀要、査読有、

34 巻、2017、99-120

小谷信千代、秋本勝、上野牧生、加納和雄、福田琢、本庄良文、松下俊英、松田和信、箕浦暁雄、新出梵本『俱舎論安慧疏』(界品) 試訳(3)、真宗総合研究所研究紀要、査読有、33 巻、2016、115-143

松田和信、『俱舎論』注釈書断簡の梵文テキスト、『智慧のともしび アビダルマ佛教の展開』、査読あり、第一巻、2016、131-141

松田和信、スティラマティ疏から見た俱舎論の二諦説、『印度学仏教学研究』、査読あり、2014、63-1、166-174

松田和信、俱舎論註釈書「真実義」の梵文写本とその周辺、『インド哲学仏教学論集』、査読あり、2014、第 2 号、1-21

〔学会発表〕(計 1 件)

松田和信、スティラマティ疏から見た俱舎論の二諦説、日本印度学仏教学会、2014 年 8 月 30 日、武蔵野大学

〔図書〕(計 1 件)

小谷信千代、法蔵館、2017、『虚妄分別とは何か 唯識説における言葉と世界』、372 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小谷 信千代 (ODANI, Nobuchiyo)
大谷大学・文学部・名誉教授
研究者番号：40141494

(2) 研究分担者

本庄 良文 (HONJO, Yoshifumi)
佛教大学・仏教学部・教授
研究者番号：00115932

加納 和雄 (KANO, Kazuo)
駒澤大学・仏教学部・講師
研究者番号：00509523

松下 俊英 (MATSUSHITA, Shunei)
大谷大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：10612765

福田 琢 (FUKUDA, Takumi)
同朋大学・文学部・教授
研究者番号：20278261

上野 牧生 (UENO, Makio)
大谷大学・短期大学部・講師
研究者番号：70460657

秋本 勝 (AKIMOTO, Masaru)
京都女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：80202547

松田 和信 (MATSUDA, Kazunobu)
佛教大学・仏教学部・教授
研究者番号：90268128

箕浦 暁雄 (MINOURA, Akio)
大谷大学・文学部・准教授
研究者番号：60351251